

## トークセッション 地域教育の明日を探る



廻し人：松村 暢彦・中尾 治司

指定討論者：関 福生・中尾 茂樹・仙波 英徳

**松村**：今まで地域とのかかわりはなかった。大学で研究室にいたがそれだけではいけないと思い、関西から愛媛大学に来た。久米地区に呼ばれて地域にかかわっている。今日は、新参者としてお話を伺いたい。

**中尾治**：生まれは、双海町である。愛媛県の教育委員会に勤めている。90分間で何か一つ、心の中に留めていただきたい。社会教育とのかかわりという視点で自己紹介を。

**関**：新居浜市教育委員会で教育長をしている。昭和56年、泉川の公民館にかかわっていた。私の思う地域は、人だと思う。「もう一度行ってみたい場所は、素晴らしい人と出会ったところ。」そう語ってくれた人がいた。出会いが、自分の人生の中でつながっていく。それがあればいい。今日は若い人がいっぱいいる中でしゃべれる、それが嬉しい。

**中尾茂**：愛南町立御荘中学校校長をしている。村上伸二先生が登壇するはずであったが難しくなり、私はピンチヒッターである。その村上先生から、「大いに語れ、まじめになるな。」と言われた。故郷を思う心がある人は皆、地域をつくる存在だと考える。修学旅行へ生徒を連れて行ったときの話をする。物見遊山なプログラムをどうにかしようと、本校出身の先輩と都会で出会う修学旅行にした。その中のお一人で、リアカーから始めて関西の大企業の社長になられた方のところへ行った。とても素敵な接待を受けた。その方のメッセージは、勉強が大事だということ。実体験からの話は子どもの心にしみる。故郷を出て、家もなくなってしまったが故郷を思う。貧乏で修学旅行にも行けなかったけれど、郷里の中学生のためにここまでしてくれる。これが地域のよさではないか。

**仙波**：平成4年にPTA活動を始めて、26年間社会教育に携わっている。本業はタクシー会社社長である。平成7,8年に松山市小中学校PTA連合会で子どもに何が課題かの3万人アンケートをとった。関わる力がないことが明らかになり、以来、「かかわる力」をライフ

ワークとしている。

**中尾治**：次の話題。地域教育実践交流集会も今年で10年目。すべてにかかわってきた3人に伺いたい。この10年の集会は、どうだったか、またご自分はどうかかわってきたか。

**仙波**：市民が築いたこの集会。民間がつくって、みんなが楽しむ。市民発信の実行委員会方式で行った。手弁当主義だから、参加費2000円を支払って、肩書も外して参加をする。くじ引きによる分散会は、内容を聞きに行くのではなく、事例に出会う、人に出会う場として始めた。分散会は、3時間のスパンで実施してきた。「長かったな」という人はいない。意味ある出会い、意味ある人と出会う。「めぐりあいのふしぎに手をあわせる。」第1回は社会教育の大先輩、伊藤敏夫さんに来ていただいた。本音は伊藤さんと一杯したくてお願いした。この1回で終わってもいいと思っていたところ、集まった人が、来年はいつするのかと催促された。だから、1回目は1回目と書いていない。4回目から次の地域の担い手にきてもらおうと、様変わりをした。6回目の時に、文部科省の人が参加。文部科省の方から、いろんな世代の人が集まる集会にお金を出すから応募してほしいと言われ、8、9、10回と補助をいただいた。その成果として、日本国内からいろいろな人が参加し、新しい出会いの枠が広がった。この集会は分散会がメイン。いろんな人が集まっていろんな話をしてきた。

**中尾茂**：本当は、22年前、讃岐先生が附属小学校の校長先生をされていたときから、構想はあった。個人的な感想としては、10年前の初期の段階は、コアの人が集まって、お酒臭い演歌のような集会、中期は夏のフェスのようになり、後期は、それぞれの役割、仕事に分かれて、ミュージカルのようになった。演歌からフェスになってミュージカル、11年目はどうするか。

**中尾治**：讃岐先生の出会い、どのような出会いだったのか、また聞かせてほしい。ミュージカルはいい表現、みんなで音を奏でながら一つのを創り上げる。

**関**：情報交換をする場も昔はあった。子どもとかかわる子どもの活動（放課後子ども教室など）をみんなが持ち寄って、自慢しようという会だった。ざくばらんな会になっている。もっと身近なところでできればいい。

この3年間、委託事業で全国各地に行った。瀬戸内だけではなく、他の地域の面白い情報を知ることができた。人とつながること、啓発する機会があって自分のことが客観的に見える場となったのではないか。それぞれで、いろんな活動をしている。7か所で文部科学省委託事業があり、去年は、北海道に行ってきた。

**中尾治**：県外発表者の方は、主に関さんがコーディネートしてくれている。昨日の会が盛況だったので、9割9分OKかなと思う。

地域教育実践者へのメッセージ。課題等もあれば語ってほしい。

**中尾茂**：教育は人、出会う、新しい自分にかわっていく。これが楽しみ。例えば、大畑さん。活躍の場が愛南町と似ていて、キャリアライフ教育と名前をつけて、「愛南の10人」という実践を行った。すごいことが起こっていると思う。讃岐先生から教員は学校から出

て行けと教わっていた。おかげで、**大畑さんとも出会うことができたのである**。また、昨日の分散会で神奈川の市ケ尾高校の2人の高校生の話を聞いた。政治家になりたいと言っていた生徒は、「ぼくらは都会に住んでいて情報がいっぱいある中で学んでいる。しかし、小さな地方の学校で学んでいる高校生は中身が熱い。生きるために大事なことを学んでいる」と。

**関**：人とつながっていくことが大切。全国各地で活動している。名刺を交換し、一緒に何かをやってみる、その場所が交流集会。人とのつながり。新居浜に来ていただいた人もたくさんいる。教えていただいたこともたくさん。人の力を借りて、自分の力を増やしていく。この会で学ばせていただいた。ひとりでやって、バーンアウトしてしまうひともしたくさんいる。自分の足らざることを知る。時代が、変わっていく。

**中尾治**：話に登場した市ケ谷高校生が来ていると思う。話をしてほしい。

**市ケ谷高校生**：2年生になる。横浜に住む前は、熊本県に住んでいた。横浜では挨拶も返してくれない。怖いからかわるのを止めようかと思った。日本各地で、地域のかかわりが薄くなってきていると感じている。伝統文化を守ろうという活動。鐘踊りをみた。子どものときは分からないが、大人になって分かることがある。この交流会もずっと続いて、子どもに伝えることができればいいと思う。

1年生の佐々木。この会に参加して、政治家になりたい、社会のリーダーになりたいという思いが、強くなった。かかわりたくないという大人が多い。電車でも座席をゆずらない、そんな大人が多い。その人たちより大きくなって正していきたい。参加させていただいて、いろんな個性ある人たちがたくさんいることが分かった。このような会で、小学生たちが、どんどん地域のことをわかってきているのに、私たちは出遅れている。リーダーになって、本当に社会に必要な人材をくみ取っていきたい。活発な高校生もたくさんいる。

**仙波**：集会のテーマは「わたしたちみんなこどもとつながっている」から、4回目以降は「かかわりをチカラに、つながりをカタチに」に変わった。集まった人たちがつながったらチカラとなる。それをカタチにしようということになった。また、事務局をするとメリットがある。ずっと公民館に携わっているが、若者が公民館活動をするのをこの交流会でリークした。現在進行中の「ふれあい食堂」は、地域の中高校生に手伝ってもらっている。また、久米の活動はこの交流会に毎回違う事例を提供できている。

**松村**：地域の中に大学生等をどう入れていくか。愛媛に来て1年間はボーと過ごしていた。久米に呼ばれ、活動することで大学生を地域活動に参加させ、また私自身も楽しい時間を過ごしている。「つながりかたちに」について、体験談など話してほしい。

**関**：泉川小中学校ではコミュニティスクールをしている。情報を地域に流す。地域の人々が何を学校に望んでいるか、どのような大人に育てほしいか聞いた。思いやれる子、自立している子ということだった。地域側からもらったものを学校に届けて、目標設定していただき、地域に戻した。

駅伝大会があった。地域の汚れている場所を投げかけて、住民に整備をしてもらおう。子

どもたちに差し入れしてもらおう。愛媛で1位となった。地域が子どもたちとかかわることができた。そのことをきっかけに新しい取り組みができた。情報をみんなに伝えること。そのしかけづくりが必要。

松村：具体的には

関：学校と地域が子どもたちのためにキャッチボールをすること。

松村：駅伝はいい。地域が見える。

仙波：新しい事業を立ち上げる時、活動してくれる人はだけでは広がらない。ちょっと足りないところを助けてもらう。ちょっと足りないところを見つける努力がいる。一つの事業をして、どう巻き込むかということとコネクターをどう育てるか。こことそこをつなげる人、それがうまくいくと、10年間、毎回違う事業ができる。

中尾茂：村上先生と、相手と目を見て話す、それが一番だけれど、今のSNSでのつながりも大切で価値があると、話した。防災教育の専門家である大木智子先生を県教委が呼び出すのに3年かかった。しかし、彼女のブログやSNSを通じて熱意を送ると、3か月でヒットして愛南町まで来てくださった。SNSを使いこなすことのできる若い人たちのネットワークも素晴らしい。

松村：フェイスブック、SNSなどを使ってつなげるのは有力なツールである。地域の問題、実践のプロセス、深めて前に進めるコツを教えてほしい。

中尾茂：目標は同じ方向を向いているといい。今この位置にいて、この方向でより具体的に語り合う。そうでないとできない。

愛南町住民には、一人一人が価値ある存在なんだと知ってほしい。地方と東京、2局をみていてもだめ、宇宙とかから俯瞰して見てほしい。

終業式の学校長式辞の中で、保護者で魚食のプロフェッショナルであり、JAXA出身の方とつながり、種子島から打ち上げられる衛星を使って、リアルタイムで養殖いけすの様子をスマホ画面でわかるようにした。餌の量とかもこの画面を見て調整することができる。この方法だと、餌代や人件費などで、1事業所当たり1億円のコストカットできるとのこと。視点の転換、それによって感じる感動があった。

仙波：市民と行政との協働。行政が思うようにつくるために市民が下請けをする。逆の事例はない。お金があるところは強い。行政が呼びかける協働と市民が思う協働とは基本的に違いがある。

実践があって議論、議論があって実践がある。両方がうまくいくのが協働。システムの構築は行政でないとできない。市民は熱い思いがある。それだけでは市民は巻き込めない。伝わると伝えるは違う。そこをうまくやっていると。

松村：行政がすることはつまらない。呼びかけ方が違うのか、行政側がもう一度立ち止まって考えてほしい。

関：行政の立場である。市民がやりたいことを達成するよう心がけている。共に作るように。新居浜若宮小学校、子どもの数が多い時には1000人、現在は37人となった。3月

で閉校する。地域住民と跡地について議論した。はじめはどう責任取るのかと責められたが、議論を繰り返すうちに、住民で新しい施設等を作り変えるという話になってきている。せめぎ合い等のようなときこそ、住民と行政が対話することによって、納得できるような着地点をみいだすことができる。そして、共に創りあげていく。市民参加のまちづくり、市民がイニシアティブをとって、行政に向かっていくような取り組みをしている。協働の裏付けには、学びがないと。

**松村**：地域教育の今後について。人口減少、充実した社会と縮小する社会を連結していく。地域と学校、社会教育はどう間違ったか。

**関**：まちが縮んでいくという指摘。自分たちの世代で幕を引くところもあるかもしれない。また、乗り越えていこうとする地域もある。学ぶことによってつなげていく。「これではいかんよね」とさせるのが、地域教育の力。別子山地域は、140人。消えていきそうだった。そこをなんとかしようとして、新居浜県立南高等学校のユネスコ部が地域にかかわって、一緒にやっっていこうとしている。

戦後、公民館は復興しようという目的でできた。ところが、豊かな部分を提供していくように変わった。物質的なものが満たされると、何かを失う。そこを考えていきたい。節目かなと思う。

**松村**：都市の施設を集めてくるという国土交通省の行政計画。集めると言うことは削るところがあるということ。施設だけの話だけではなく、活動をどうにかしなければならぬ。やらない地域は見捨てられるということが加速される。

**中尾茂**：「子どものために」ということが、ぶれなければすべて地域教育。ポスターや作文を書いてだけの人寄せパンダではいけない。地域教育は、一番大きな教科だと思っている。具体的に言えば、防災とか食育とか。先ほどのスペースタイを使って、子どもたちが開発したメニューを提供しているお店がある。2万食が売れた。可能性を無限にある。

**松村**：社会に働きかける実践、必要かな

**仙波**：社会教育主事の人数は、7割減。支えるのは、社会教育経験者。風邪を引き病院に行くとお金がかかる。予防だとお金がかからない。社会教育を今見直して、手直しをする、立て直しをしないといけない。あちこち、地域でしないといけない。小学校単位でやればいいと思う。参加した人の人数ではなくて、参加した人が地域に帰って何をしてくれるのか、そのような取り組みが必要。

**松村**：会場からの思いはないか。

**A**：人寄せパンダ、子どもに対する期待、あまり、重くさせたくない。ゲストティーチャーを呼ぶと、感想文を書かなくてはならない。無理をする。人権ポスター等も同じ。自由に、自発的にさせてやりたい。横につながってのしがらみ、健全なものをつくる。地元の大人がやらんといかん。去年から、学びが多くなった。

**B**：徳島唯一の村。村育をしている。国道11号、徳島県庁から愛媛県庁までつながっている。学校と社会教育、学校の目標と地域の目標の共有といわれているが、どのようにして

共有できるか、教えてほしい。

関：学校支援本部活動、学校長に旗を振ってもらおう。学校が地域に困ったことをなげかける。連絡協議会等を通じて、対話する。

仙波：学校教育は信じていない。なぜなら、学校は、2、3年で職員が変わる。基本的には、学校は信用しないで子どもを信じている。それで、学校のカリキュラムの中に地域事業を組み込んでもらう。そうすると残っていく。先生が異動になるとなくなってしまうことが多すぎる。

C：南九州から参加している。素敵な笑顔を貰った。いい刺激を貰った。エネルギーにかえてこれからの糧にしていきたい。鹿児島にも来てほしい。

鈴木（ゲスト）：まだまだ、いろんなことをやっていかなければいけないと自覚した1日だった。

馬場：社会教育はこれからどうしていくのか、主事の資格がとりにくい。履修時間が多い。しかし、資格を取っている人は多い。社会教育とは関係ない人、しかしやっていることは社会教育であることが多い。気づきというか、そうなってくれば、社会教育は必要なんだねとなる。

初めて2月11、12日、徳島で交流会を開催するので、ぜひ参加してほしい。

中尾治め：総括でおひとり一言ずつ

中尾茂：直感だけで話をした。アフリカでは、「一人の子どもを育てるのに、村人全員の力が必要である」ということわざがある。その通りだと思う。

仙波：少しでも、気づいてくれればいい。新しい仕掛けを考える。

関：希望、好き、みんなと一緒にあって、創っていく。来年、また出会えたら嬉しい。